

平成28(2016)年「正覚寺報」11月号

ご案内

お聴聞と人生を語る会 11月6日(日)20時～

本会では、阿弥陀如来が衆生の上にお姿を現わされる一部始終をお訊ねしております。

仏教婦人会例会 11月16日(水)19時半～

お聴聞の会の婦人会版です。お参り下さい。

第3回連続研修会 12月3日(土)13時半～

研修テーマに“宗教は必要か否か”が設定されました。流動化社会でお念仏のコミュニティの存続が危ぶまれる危機をどう克服するか、親鸞聖人が社会性、公共性との関わりで認められた“ご消息第25通”を手掛かりに話し合ってください。

境内の庭木の剪定・清掃にご尽力戴きました

報恩講勤修に向けて、総代様方、仏教壮年会員の皆様には、10月15日、境内の庭木の剪定・清掃にご尽力戴きました。誠に有り難うございました。

内陣の佛具のおみがきにご尽力戴きました

10月23日には、同じく報恩講勤修に向けて年行事の皆様には、お内陣の佛具の“おみがき”にご尽力戴きました。誠に有り難うございました。

年に一度の最重要のご法座“報恩講”営まる

10月29日・30日には正覚寺報恩講が営まれました。今年は、初めてお東のお寺様玄照寺ご住職元親鸞会講師部員でいらっしゃる“瓜生 崇師”をお客僧としてお迎えました。

御法話は、お客僧の自らの人生のご苦労に根ざし、逆説的表現を随所に取り入れた分かり易くしかも奥深いお話でありました。お初夜では、

生死の苦海ほとりなし

ひさしくしづめるわれらをば

弥陀弘誓のふねのみぞ

のせてかならずわたしける(龍樹讚)を取り上げてお話戴き、生まれ変わり死に変わりしてきた流転輪廻の迷いの人生“苦しみ的大海”は、ほとりがなく、これこそ確かだと念ってすがろうとした

とき見えた筈の島は消えてなくなっているというお話は、聞法する私どもの胸を打ちました。

お帰りに際しては「(親鸞会)脱会から再び念仏に出会うまで」という御書物を頂戴致しました。勘当されていた父親に「お寺の住職となる」とうちあけると、「お前ならそう云うと思っていた。実は大事な話がある」と云われたそのときには、既に父は末期癌で余命幾ばくもなく、毎日曜に病院を見舞う都度、父は、自らの人生を振り返って「自分の人生はつまらん人生だった」とボロボロ涙を流し私の手をギュッと握りしめて帰らんでくれと懇願する父のその手をふりほどいて仕事の為に帰らざるを得なかった自分の姿をそのまま吐露していらっしゃるお話は胸に迫りました。

父の姿、私の姿こそは煩惱成就の凡夫であって、阿弥陀様のご本願は、そのような浅ましき凡夫がお救いに与っていきみ教えであること、

私達は、既にして本願成就し、働いていて下さる南無阿弥陀仏のお名号の中で苦悩し、終にお救いに与っていることに気付かされるのであると結ばれたかと窺いました。満日中のご法座は、ややお時間がありませんでしたが、これが結びのお心ではなかったかと頂戴致しました。

超専寺様の親鸞聖人 750 回忌法要営まる

滋賀組では、去る10月23日、親鸞聖人750回大遠忌報恩講が営まれました。総代様と住職、坊守がお参りさせて戴きました。御堂さんという中央仏教学院の先生によるシンセサイザーの生演奏に乗せて厳かに音楽法要が営まれました。CDでは難しい柔軟な次第が生演奏の長所であることを実感させて戴きました。記念御法話は、正源寺のご住職様よりお聞かせ戴きました。その内容は、りびんぐらいがず 11月第2号「名号をとへんものをば極楽へ迎へん」に取りまとめてありますのでお聴聞の会並びに佛婦例会にぜひお参り戴き、御法話と共にご覧になって下さいませ。合掌。